

目次

- 1 「物理学訳語会」
- 2 専門家の増加と専門用語の定着
- 3 「一見さん」相手か、「常連さん」相手か
- 4 「mechanics」の現在
- 5 明治初期の西周と「訳語会」のあいだ

1 「物理学訳語会」

中村邦光『江戸科学史話』創風社2007年に「力学」という翻訳語が登場した歴史が書かれている。この本の「第4部 江戸から明治への過度期における科学史上の出来事の事例、3話 日本における西欧近代科学の受容と「訳語」の選定」である。明治16—20年（1883—87年）ごろ、「物理学訳語会」という継続的な研究会の報告のような形で提案され、それが専門家の間に定着したというものである。文部省制定とかでなく専門家の学会的な活動とみてよい。

はじめに力学関係での現在使われている述語（「力学」「運動量」のように括弧付きで書く）と一時的に現れて消えていった述語を見ると次のようである。

「力学」 器械学、機械学、重学

「速度」 速力、快漫、遅速、速勢、速緩、疾徐、速、速率

「運動量」 速力、動力、行動力、運動力、動量、力元、速率力

「能率」 平均量、動量、重矩率、率能、力能、力之能、能力

「質量」 量目、秤量、掛目、斤量、目方、重さ、実質之量、真量

「慣性」 無精、惰性、遅鈍、鈍性、鈍勢、習慣性、凝滞性

訳語には日常語に近づける努力と積極的に新語を製造する方向があったことが窺える。明治のこの時期に科学の専門語の策定に注力したのは物理学だけではなく多くの専門分野で一斉になされた。

2 専門家の増加と専門用語の定着

中村は日本の近代科学の受容は次の4段階で見るのがよいとしている。①幕末「江戸の常識(儒学的自然観)の素養に基づく「試行錯誤の時代」、②明治初期には「江戸の常識」を捨てて和魂洋才での「急速・摸倣の時代」、③明治中期にの専門家の出現と「訳語会」の発足による「理解の時代」、④明治末の二十世紀からの世界に先駆けた科学者達の出現による「創造の時代」。

「物理学訳語会」は1883年5月から1885年7月まで毎月第二、第四水曜日に開催され、決めたことは「物理学訳語会決議」として『東洋学術雑誌』に随時掲載したようである。

通常の国語辞典の編纂のように使われている用語を採取して決めるという方式

ではなく、正しい理解を助ける工夫に重点を置いた作業であったようだ。中村の紹介によると例えば velocity の訳として当時は「速力」が相当普及していたが、これは、重力などと並ぶ、力の一種という誤解される可能性やさらに運動と力は別だという理論的議論もあって「速度」という訳語を製造したようだ。

3 「一見さん」相手か、「常連さん」相手か

また中村は江戸時代を次の三段階に分けて理解するのがよいとしている。第一段：江戸時代前期発展の時代、第二段階：17—18世紀初頭（1720年ごろの吉宗の享保改革）からの停滞退歩の時代、第三段階：幕末十九世紀中頃近代化前夜。

蘭学や江戸末の出版は不特定の読者（領域が定まっていない学識者）を対象にしていたが、明治中期になると、留学とお雇外人教師による教育で専門家の数が増してきたのでその集団内で普及すればよいという明確な目的ができた。訳語会はこの時期に登場した。専門家用に決めた述語なのでその普及が非常に徹底していた。現在の力学系単語には第一段階に中国から入った漢学科学書からの訳語会の造語が多いようだ、第二段階、第三段階での日本での蘭学や洋学本からの単語は殆ど採用されていないという。この時期の読者対象が一般の教養層なので日常語に近いものを用いたが、抽象的概念が多い力学では新語を作る方が適していたのである。

言うなれば、「一見さん」相手の単語から「常連さん」相手の単語へと「訳語会」で変わったのである。専門家相手だと単語は単なる「意味」のシンボルでよい。時間をかけてシンボルに「意味」を込めるプロセスがあるからである。それに対して、「一見さん」は一般語との類推で「意味」を想像する。このような用語、単語、言語の二重の流れがオーバーラップする領域が学校教育やポピュラーサイエンスの世界である。いまでも忘れてはいけない重要課題なのである。

4 「mechanics」の現在

「mechanicsは力学か？」という問題意識に関して当時どんな議論があったかに答える記述は中村の著述にはないのでここからは推測も入った議論である。

まず「機械」の学がすでに重要な専門分野として存在するからmechanicsを機械学とするわけにはいかなかった事情がある。様々な具象的な対象を超えたメタ的な学問であるという認識のもとに、抽象的なニュアンスを出す意味で力学という造語をしたのであろう。当時の物理学の状況では「力」は具体的なもののメタとしての抽象性を備えたものの表現なのである。現在のように物質に支えられた「四つの力」といった実在的「力」の学ではなかった。「力」は物に根拠を持つ存在ではなく運動に影響を与える作用という抽象的概念であった。

日本がmechanicsに接した明治初期、欧州でもすでにmechanicsには出自の「機械」と現在の抽象的な学問名としての意味が重なっていた。だから機械学と訳するのが正しくなく、別の言葉が必要であると考えた「訳語会」の認識は正しいと言える。

こうなるとヨーロッパ語のなかでのmechanicsの意味の拡大に興味がいく。例えば、Oxfordの英英辞書ではmechanicに次のような四つが併記されている。①機械工、②力学（運動と力のサイエンス）、③実用機械学、④段取り(例文：The exact mechanics of how payment will be made will be decided later)。すなわち、欧米語では現在では相当に違った内容を同じ単語で表現しているのである。それに対して後発国の日本などでは、既に明確に異なった意味に展開した概念毎に別々の単語を造語して表現したということである。

現在、「力学」は古典力学、流体力学、熱力学、統計力学、量子力学などのように、「XX力学」のようにXXの一般理論という意味で多用され、「力」の学かなどには悩む場面は少ないであろう。

5 明治初期の西周と「訳語会」のあいだ

漢字の故郷である中国で現在使われている学問的な言葉の多くが「和製漢語」であることが指摘されている。西洋学問の漢字での表現のための造語が幕末・明治初期の日本で積極的になされ、それが中国に逆輸入されていったという歴史があるのである。

この造語作業で主役を果たしたのが西周である。「哲学」、「学術」、「科学」なども彼の造語であるようだ。しかし現在の力学の意味でのmechanicsにも西は機械学という直訳をあてている。「力学」は彼から20年ほど後の「訳語会」の造語であることは確かのようなのである。こちらは内容を考えて意識しているである。

西から「訳語会：」の間に起こったことは、福澤諭吉のように人権も窮理学（物理学）も語る総合学者でない専門分科の学問に専念する職業人の増加である。それが日本では「訳語会」が登場した時期（～1985年）なのである。

拙著『職業としての科学』（岩波新書）第2章に書いたが、英国ではこの時期が1830年代であった。scientistという言葉はこういう職業人を表すためにこの時期に新英語単語として造語されたのである。

[終わり]